

# 1974年公表の大場牧夫保育構造論に関する研究

横松 友義

本稿では、1974年公表の大場牧夫の保育構造論について、彼の保育構造論の成立・発展史の中に位置づけた上で、その成果に基づきつつ、また、先行研究の成果も参考にしながら、新たな視点を加えて、再分析し再考察している。1974年公表の大場の保育構造論は、彼の保育目的を実現するであろう三層構造カリキュラムを成立させた最初の保育構造論である。その中には、保育目的を実現できる保育者の働きかけ全体を確実に生み出すための基本的な考え方と諸工夫が示されている。また、その基本的な考え方を示す三層六領域構造は、あくまで基本的な考え方であり、この分け方ではとらえられない例外的なものも認めようとする柔軟性のあるものである。

Keywords：大場牧夫，保育構造論，保育内容構造論，教育課程の構造，カリキュラム・マネジメント

## 1. 本研究の目的

保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領は、2017年3月に、幼稚園教育要領の改訂内容を踏まえ、その内容と整合する形で改訂されている。その幼稚園教育要領の基本的な考え方は、周知の通り、小学校以降の学習指導要領の基本的な考え方と同様に、中央教育審議会において、「学習指導要領等」という言葉で全体としてとらえられ、検討・構築されてきた。

その際の審議の重要なキーワードとして、「教育課程」の「構造」ないし「枠組み」をあげることができる。例えば、中央教育審議会が2015年8月に公表した『教育課程企画特別部会 論点整理』では、育成すべき資質・能力の三つの柱として、「個別の知識・技能」、「思考力・判断力・表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」があげられ<sup>1)</sup>、次のように述べられている。「次期学習指導要領等については、資質・能力の三つの柱全体を捉え、教育課程を通じてそれらをいかに育成していくかという観点から、構造的な見直しを行うことが必要である。これはすなわち、教育課程について、『何を知っているか』という知識の内容を体系的に示した計画に留まらず、『それを使ってどのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか』までを視野に入れたものと

して議論するということである。<sup>2)</sup>」また、「各教科等で育まれた力を、当該教科における文脈以外の、実社会の様々な場面で活用できる汎用的な能力に更に育てていくためには、総体的観点からの教育課程の構造上の工夫が必要になってくる。<sup>3)</sup>」あるいは、「教育課程の総体的な構造を可視化していくことが求められる<sup>4)</sup>」と述べられている。続いて、中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会が2016年の8月に公表した『次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめ』では、そうした教育課程の構造化について、次のように述べられている。「この『教育課程の構造化』が目指すのは、一言で言えば、社会において自立的に生きるために必要な『生きる力』とは何かを資質・能力として具体化し、そうした資質・能力を確実に身に付けていくことを目指す教育課程の枠組みを分かりやすく再整理し、示すことである。<sup>5)</sup>」その上で、2016年12月の中央教育審議会答申で、「教育課程の枠組みの整理」がなされ、「教育課程全体の枠組み」について論じられている<sup>6)</sup>。

以上からも分かるように、2017年3月改訂の幼稚園教育要領等においては、生きる力を示す資質・能力を明確にし、それらを確実に育てることのできる教育課程の構造ないし枠組みを明示することが目

指されている。そして、それを実現する方法がカリキュラム・マネジメントであることは、周知のことである。

このように実際の教育を構造的にとらえる考え方は、保育の分野では、保育構造論と呼ばれている。そして、一般に、保育構造論は、保育内容の構造論ととらえられている<sup>7)</sup>。保育構造論の歴史について整理している小木によれば、保育内容を構造化しようとする試みは、1960年代から本格化し、1980年代にその検証が進められ<sup>8)</sup>、その後の展開については、田中が、日本の幼児教育方法史研究をとおして、次のように指摘している。「1990年代以降、子どもの自発的な遊びを通じた総合的な教育が強調されたことによって、構造論は急速に消えていった。構造論的視点では、子どもの生活や活動に保育者の一方的な立場から分断的に捉える傾向になるというのがその理由である。<sup>9)</sup>」この保育構造論に対する批判点については、小川も同様な観点から、次のように述べている<sup>10)</sup>。「構造論は子どもたちに何を経験させたいかという点からの構造化であって、それらの内容が幼児たちにとってどんな意味をもつのかといった点からのものではない。」「『生活』と『遊び』を区別する必然はない。子どもにとっては、なかでも3歳児などではごっこ遊びとお片づけは、区別できる活動ではない。」

しかし、1990年代以降も、保育構造論の必要性は、指摘されてきた。例えば、光本は、「子どもの実態—保育のねらい—カリキュラム作成—保育の実践—保育の分析—といった実践のサイクルの各要素それぞれに位置づく」「保育構造」の追求を重視する<sup>11)</sup>。つまり、論という視点で見れば、その追求の成果全体が保育構造論としてとらえられることになり、光本は、保育実践全体の構造論を追求しているといえるであろう。こうした立場に立つ光本は、次のように論じる<sup>12)</sup>。「保育を構造的に捉えるという視点は、単に保育活動の成り立ちを重層的に捉えるということではなく、それぞれの要素が相互に力動的に作用することを提示し、保育実践における〈保育者の指導内容および方法〉と〈子どもの発達〉とを広角的に捉えていくことを含んで」おり、「保育者の指導の矮小化、保育者の指導と子どもの自主活動との偏向をとどめる可能性をも含んでいるといえよう。」

さらに、横松らは、この光本の考え方と共に、保育構造論の効果についての吉村の指摘<sup>13)</sup>に注目する。それは、保育実践を行う際に、「個々の活動が長い見通しの中でどういう時点にあるのか、または生活全体の中ではどんな位置を占めているのかを関連づけて考えることに気づかせてくれる点」にある

のではないかという指摘である。その上で、「保育構造論の存在意義については、保育全体の中で今の実践がどう位置づくのかを意識できることにつながり、保育者の指導性の矮小化や保育者の主体性が子どもの主体性かのどちらか一方を偏重することをとどめることができるであろう。<sup>14)</sup>」と主張する。

横松らのいう「保育全体の中で今の実践がどう位置づくのか」が明確になることは、教育課程の枠組みの実現のために、これから本格的に導入されるカリキュラム・マネジメントとの関連で言えば、目標・内容・方法の連関性が確保されるということである。また、「保育者の指導性の矮小化や保育者の主体性が子どもの主体性かのどちらか一方を偏重することをとどめる」という考え方は、教育課程の枠組みにおいて育成しようとしている資質・能力を確実に育てる上で、必要な考え方であるといえる。つまり、光本や吉村や横松らの研究成果は、教育課程の枠組みを明示してカリキュラム・マネジメントにより実現するこれからの幼稚園等の保育を創り上げていく上で、役立つ可能性があることを示唆するのである。

また、横松らは、これまで批判されてきた保育構造論と光本の追求する保育構造論とを区別し、前者を「保育内容構造論」、後者を「保育実践構造論」と呼び、クーンのパラダイム論を援用し、両者の検討や構築の在り方について新たな見解を提示している<sup>15)</sup>。

これらの先行研究に対して、執筆者は、ここにおいて、従来批判されてきた保育構造論について、前述の横松らの研究も参考にしながら新たな視点を加えて、再分析し再考察する歴史研究を開始したい。そのことをとおして、1960年代以降に研究が本格化した保育構造論の再評価とそれらの歴史についての新たなとらえ方を提示すると共に、その成果から、教育課程の枠組みを明示してカリキュラム・マネジメントにより実現するという考え方をこれから本格的にわが国の保育施設に導入していく際の留意点について示唆を得ることを目指している。例えば、そのことを実施する上での課題は何か、保育に関する考え方や実践はどのように発展していくのか等について示唆を得ることを目指している。

こうした立場に立ち、執筆者は、大場牧夫の保育構造論に注目している。彼の保育構造論に注目する理由については、まず、彼は、1980年代以降も保育構造論を維持・発展させており、1989年の幼稚園教育要領の改訂にも関わっている<sup>16)</sup>。さらに、1992年に刊行された著書『保育内容総論—保育内容の構造と総合的理解—』には、当時の彼の保育構造論が、掲載されており、永眠された1994年以降も、

幼稚園教育要領及び保育所保育指針の改定に伴って刊行された2000年の改訂版と2009年の新訂版においても、高い評価の基に、章と節と項の名称は変えられることなくほぼ同じ内容で所収されている。つまり、彼の保育構造論は、今日においても通用するものに発展しており、したがって、教育課程の枠組みを明示してカリキュラム・マネジメントにより実現するという考え方をこれから本格的に保育施設に導入していく際にも、多くの示唆を与えてくれる可能性があると考えられる。

そこで、本稿では、大場牧夫の保育構造論に関する研究の出発点として、彼が最初に保育構造論の全体像を提示したと考えられる1974年公表の保育構造論を対象にする。まず、大場牧夫の保育構造論の成立・発展史を概観し、その中に位置づけた上で、その成果に基づきつつ、横松らの示す保育内容構造論の検討や構築の在り方も参考にしながら、新たな視点を提示し、加えて、再分析・再考察し、再評価することを目的とする。

## 2. 大場牧夫保育構造論の成立・発展史の概観と1974年公表の保育構造論の位置づけ

大場牧夫の保育構造論の成立・発展史については、彼の1994年の著書『原点に子どもを—大場牧夫の保育論』に詳しく述べられている。ここでは、この資料に基づいて彼の保育構造論の成立・発展史について概観し、1974年公表の保育構造論の歴史的な位置づけを行うことにする。

大場によれば、まず、「後の生活カリキュラムの作成時に累積資料の中心になったのが、週案で」あり、「これは、一九六〇年くらいからはじめて」いる<sup>17)</sup>。つまり、彼の生活カリキュラムは、1960年頃から作成し累積された週案を基礎に創られているということである。その後、「一九六三年に、二つの層のマスタープランを作りかけ」、「これが手掛かりになって、三層構造の生活カリキュラムへの動きがはじまる」<sup>18)</sup>という。そうして、「生活を通しての保育の大事さに十年かかって自分で気がついてきた<sup>19)</sup>」という。実践開始が1955年である<sup>20)</sup>ので、十年後である1965年頃に、「生活を通しての保育」を追求する段階に入ったということになる。「そこででてきたのが、三層構造、三つのフィールドで、生活を組み立てようということ<sup>21)</sup>」であった。「子どもにとって必要なのは、生活のフィールドなのだ、そこで生活することによって、おのずと個が育ち、集団が育ち、また集団が育ち、個が育つという状態になるのではないか、ということを考えはじめた<sup>22)</sup>」という。そして、実際には、「昭和四十二年

に生活の組み立てを考え直して」、「〈自由活動〉、それから〈課題活動〉〈生活労働的活動〉」という三層構造で園生活をとらえようとするようになる<sup>23)</sup>。1967年に、実際に三層構造で園生活をとらえることが始まるということである。ただし、こうした三層構造で園生活をとらえて、個と集団を育てる保育を構想するという考え方が確立するのは、彼が保育の原点を得た1970年頃である。彼は言う。「一九七〇年頃に、個も集団も原点を押さえて考えなければ、形式的発想になるだろうということが、やっとわかってきたのです。<sup>24)</sup>」

それでは、三層構造で園生活をとらえて保育を構想する大場牧夫の考え方を実質的に意義のあるものにした保育の原点とは、何であろうか。それは、「〈なんのために幼児教育をやっているのだろう〉というところ<sup>25)</sup>」であり、保育目的といえるものである。この点について、彼は次のように述べている。「出発点としては、愛情や、子ども理解や、人間としての育ちを考えることは間違いではないのですが、でも、それは保育する側の視点です。そこでやっと気がつきました。原点に、子どもを置くということです。<sup>26)</sup>」それでは、保育の原点に子どもを置くとはどういうことであろうか。大場牧夫においては、それは二つの方向性を持っている。一方では、「目の前の子どもたちのもっているもの、子ども自身の身体、感覚機能、感情の動き、考える力、想像性の動き、論理性の動き、さまざまな表しを大切にしたいと思えます<sup>27)</sup>」と述べる。他方では、「保育のなかで、本当に人間同士の信頼関係、認め合い、そして、〈愛〉を、本当に理屈抜きで感ずるようになるかどうか、これが、問われなければなりません<sup>28)</sup>」と述べる。つまり、彼が保育の原点を得たということは、目の前の子どもたちの持っている表しを本当に大切にす、そして、その子どもたちが、友達や先生との人間関係の中で、本当に、信頼関係、認め合い、そして愛を感じられるようにするという確固たる保育目的を得たことを意味するといえるのである。

1970年頃に、大場が自らの保育目的に到達したことにより、その後の彼の三層構造カリキュラムの追求は、実質的なものになる。そして、1974年に、「三層構造カリキュラムの最初<sup>29)</sup>」が公表される。大場牧夫編著の『幼児の生活とカリキュラム』がそれであり、本稿が研究対象としている、彼が最初に保育構造論の全体像を提示した著書である。大場は、この著書により彼の所属する桐朋幼稚園の「基礎ができあがった<sup>30)</sup>」と述べている。この点に関連して、大場は、1994年の時点で、この最初の三層構造カリキュラムを「(昭和…執筆者注)五十八年、そして、

さらにまた変えた<sup>31)</sup>」と述べているが、これらの変更は、園生活の子どもにとっての「意味」や「必要性」等の観点から、さらには、「一人ひとり」や「子どもの自発性」等の観点から、検討・修正された結果である<sup>32)</sup>。つまり、この1974年に公表された『幼児の生活とカリキュラム』に示されている大場牧夫の保育構造論は、彼が自らの保育目的実現のための三層構造カリキュラムをとりまとめることを可能にした、最初の保育構造論であり、その後も検討され発展させていく元になるものと位置づけることができるのである。

### 3. 1974年公表の大場牧夫保育構造論を再分析し再検討する際の新たな視点の提示

このことに基づきつつ、さらには、横松らの示す保育内容構造論の検討や構築の在り方も参考にしながら、ここでは、この1974年公表の保育構造論を再分析し再考察するための新たな視点を提示する。

大場牧夫の保育構造論に関する先行研究は、二つに大別できる。一つは、彼の構造論の保育史上の位置づけについての研究であり、その例として、小木<sup>33)</sup>や石垣<sup>34)</sup>や小山<sup>35)</sup>の研究をあげることができる。今一つは、彼の保育構造論そのものについての研究であり、その例として、師岡<sup>36)</sup>や光本<sup>37)</sup>や小川<sup>38)</sup>の研究をあげることができる。執筆者の研究は、彼の保育構造論そのものについての研究であり、師岡らの研究が直接の先行研究になる。

まず、先行研究では、大場牧夫の保育構造論は、保育者の働きかけの構造、あるいは、園生活の構造ととらえられており、彼の提示した三層六領域構造が検討対象になっている。しかし、前述のように、大場において、三層構造で園生活をとらえ保育を構想する考え方を実質的に意義あるものにしたのは、保育目的である。したがって、大場の保育構造論の全体像を理解するためには、その両者の関係を解明する必要がある。

続いて、本稿では、横松らの研究を参考に、前述の先行研究とは異なる新たな視点を導入する。横松らは、前述のように、保育構造論について、その内容から保育内容構造論と保育実践構造論に区別する。なぜなら、「保育内容の構造化」と、「保育実践全体の構造化」とでは、「当然内容も異なってくるし、保育における活かし方も違ってくる」と考える<sup>39)</sup>からである。この横松らの分類によれば、大場牧夫の保育構造論は、保育内容構造論に含まれると考えられる。彼らは、クーンのパラダイム論<sup>40)</sup>を援用しながら、この保育内容構造論を検討する際に必要な視点について論じている。彼らは言う。「パラダ

イムとは、一定の専門家集団に対して問い方や答え方の手本を示すものを意味するが、例外もあることを前提にしている。そのパラダイムを持つことが、基本的に問題解決上有効であるという考え方といってよいであろう。<sup>41)</sup>」また、「パラダイムは、周知のように、転換が起きることが前提になっている。つまり、作り変えられることが前提である。<sup>42)</sup>」彼らは、このようなパラダイム論理解に基づくと共に、それまでの保育構造論批判の中で、保育内容構造論に対する批判として適切と考えられるものについても論じている。その上で、保育内容構造論の検討視点として必要な三つの視点を次のように述べている。「長期的視野から特に何を重視するかが考えられているか。カリキュラム等と共に、基本的考え方として頭に入れておけば、保育者が豊かな指導をより確実に実現できるか。保育者の受けとめ方が考慮されているか。<sup>43)</sup>」

最初の視点、すなわち、「長期的視野から特に何を重視するかが考えられているか」については、大場牧夫が幼児教育を「『人間教育』としての基礎になる」<sup>44)</sup>ととらえていることや「幼児教育の主軸は、人間性の基礎の形成であり」<sup>45)</sup>と述べていることから、考慮されているといえる。また、最後の視点、すなわち、「保育者の受けとめ方が考慮されているか」については、次のように考えられる。本稿で研究対象としている1974年の保育構造論は、その全体像を示した最初のものである。保育者の受けとめ方が反応として返ってくるのはその後であり、この点については、彼の保育構造論のその後の発展過程においてこそ確認できると考えられるので、本稿では問題にしない。

しかし、もう一つの視点、すなわち、「カリキュラム等と共に、基本的考え方として頭に入れておけば、保育者が豊かな指導をより確実に実現できるか」という視点は、1974年公表の大場牧夫の保育構造論を検討する際の重要な視点になると考えられる。それは、次の理由からである。わが国の保育施設には、これから本格的に、教育課程の枠組みを明示してカリキュラム・マネジメントにより実現するという考え方が導入される。この考え方に基づけば、子どもの持っている表しを大切に育てることを基本にしつつ、生きる力として明示された資質・能力が子どもに確実に身につく保育者の働きかけがより強く意識されることになると考えられる。そして、この資質・能力を育てる際の確実性がより強く意識されるようになるからこそ、「基本的考え方として頭に入れておけば、保育者が豊かな指導をより確実に実現できるか」という視点は、検討視点として重要に

なると考えられる。

ここでいう豊かな指導とは、1974年に公表された大場牧夫の保育構造論の枠組みでは、彼の保育目的を実現できる保育者の働きかけと言い換えることができる。その保育者の働きかけ全体を確実に生み出すために追求されたのが、保育構造論であり、一つの到達点として示された保育者の働きかけ全体が、1974年に公表された三層構造カリキュラムであるととらえることができる。

したがって、この「基本的考え方として頭に入れておけば、保育者が豊かな指導をより確実に実現できるか」という検討視点に立ち、この1974年公表の三層構造カリキュラムの成立を可能にした、保育目的を実現できる保育者の働きかけ全体を確実に生み出すであろう基本的な考え方と諸工夫に注目し、それらを明らかにすれば、その内容から、これからの保育施設保育の在り方について示唆を得ることのできる可能性がある。

そこで、まず、1974年公表の大場牧夫の保育構造論において、彼の目指す保育目的の実現と、三層構造で園生活をとらえて保育者の働きかけ全体を構想するという考え方、すなわち、三層六領域構造として保育者の働きかけ全体を構想するという考え方とが、どう関係しているのかについて解明する。その上で、その三層六領域構造として保育者の働きかけ全体を構想するという考え方に基づいて、彼の保育目的を実現するであろう三層構造カリキュラムの成立を可能にした諸工夫について解明する。

#### 4. 1974年公表の大場牧夫保育構造論における保育目的を実現できる保育者の働きかけ全体を確実に生み出すための基本的な考え方と諸工夫

前述のように、大場牧夫の保育目的は、目の前の子どもたちの持っている表しを本当に大切にすること、そして、その子どもたちが、友達や先生との人間関係の中で、本当に、信頼関係、認め合い、そして愛を感じられるようにすることであるといえる。その保育目的は、1974年公表の保育構造論でも、本論の最初に明示されており、「子どもたちの行動に人間ならではの価値あるものを認める」<sup>46)</sup>という言葉で端的に表現されている。

大場は、子どもたちの行動に見られる人間ならではの価値あるものについて、次のように論じている。子どもたちは、「生理的存在、生きとし生けるものとしての存在」であり、「感覚、感情の働きを持っている存在」であり、「『思考』することができ」、「さらに『言語』が結びついて表現できる存在」であり、「ものごとを考え出したり、作り出したりすること

ができる」「幼児なりの『創造性』がある」存在である<sup>47)</sup>。それと共に、子どもたちは、「社会的存在」であり、そのことは、「人間関係の中で人間的存在のみが保持しうるものとしての『愛』ということ、どうやって子どもたちが獲得することができるか」を意味してくる<sup>48)</sup>。

子どもたちの中に、こうした価値あるものを見、それらを認める立場から、大場の幼児教育についての基本的考え方が次のように導かれてくる。「『感覚』『感情』『思考』と『言語』の働きを幼児期にして立派にもっている」「その『主体』である『子ども』を教育していく場合に子どもなりにそのもてるものを働かし、その主体的な経験や活動を通しての変革が考えられなければならないということ、どれだけ強く意識しているか問題にしなければならない。」<sup>49)</sup>あるいは、「幼児期の教育—保育—において、自立とか自律ということはよくいわれる。しかしこの自立とか自律ということ、あるいは社会性などということは子どもの幼児なりの『主体性』がたいせつにされ、諸経験や活動が幼児なりの主体的な受容と表現のものとなさなければ、本物とはいえない。<sup>50)</sup>」また、「幼児なりの『創造性』があるということ、認め、たいせつにすることが必要である。<sup>51)</sup>」さらに、「親と子ども、教師と子ども、子どもと子どものふれあいの中で、『愛』ということを理解し、それを生活の精神の中に加えるように働きかけることが必要である<sup>52)</sup>」。

大場の保育目的、すなわち、目の前の子どもたちの持っている表しを本当に大切にすること、そして、その子どもたちが、友達や先生との人間関係の中で、本当に、信頼関係、認め合い、そして愛を感じられるようにすることについては、1974年の段階では、以上のように論じられている。

それでは、この保育目的の実現と、三層六領域構造として保育者の働きかけ全体を構想するという考え方とは、どう関係しているのでしょうか。大場は、まず、子どもを常に変化する存在ととらえる。すなわち、幼児は「この時点までなんらかの『変化してきた存在』」であり、「『未来において大いに変化する可能性をもつ存在』」である<sup>53)</sup>。しかし、その変化はさまざまであり、プラスの方向もあれば、マイナスの方向もある。したがって、大場は、「一人一人の子どもが『発達の流れ』にそって変化していくことを考え、それが、より十分に行なえるように『働きかける』」ことが重要になり、「常に子どもがプラスの方向に変化する」ように、「発達の流れ」にそって、「積極的にプラスの変化をもたらすように『働きかけ』をしなければならない」と考える<sup>54)</sup>。つま

り、子どもたちの持っている表しを本当に大切にするという大場の保育目的は、その表しを示す子どもが常にプラスの変化をする、さらには、それを積極的に推し進める働きかけにより実現すると、考えられているわけである。

大場は、「さらにこの『働きかけ』は単に一人の子どもにだけ行なわれるのではなく、その子どもが含まれる何人かの子どものかたまりに対しても行なわれる」<sup>55)</sup>と述べる。それは、子どものかたまりが入園当初の「群れ」から「集団」に変化していくための働きかけのことである<sup>56)</sup>。この考え方は、三木安正編著『年間保育計画』<sup>57)</sup>を資料に、南博の『体系社会心理学』<sup>58)</sup>に基づいて、集団といえる条件を「1 一定の場所」「2 一定の時間」「3 共通の目標をもつ」「4 目標に対して組織化する」「5 成員にコミュニケーションが成立する」「6 心理的關係が成立している」ととらえて、得られたものである<sup>59)</sup>。この群れから集団へと子どもたち自身が変化していくための働きかけが、大場のもう一つの保育目的、すなわち、その子どもたちが、友達や先生との人間関係の中で、本当に、信頼関係、認め合い、そして愛を感じられるようにすることの実現のためであることは、明らかであろう。

このように、大場牧夫の1974年公表の保育構造論においては、保育者は、保育目的を実現するために、発達の流れにそって、常にかつ積極的に、子どもたちにプラスの変化をもたらしつつ、子どもたちのかたまりが群れから集団に変化していくための働きかけを行うことになる。そのことを彼は、「個人と集団の変革のために、わたしたちは幼児に働きかける<sup>60)</sup>」と述べている。

この個人と集団の変革のための働きかけを確実に生み出すためにはどうすればよいのか。こうして求められたのが、働きかけの構造である。彼は言う。「幼児は生きている、そして働きかける教師—保育者—も生きている実践をするための働きかけの骨組みを作ることを考えていかなければならない。<sup>61)</sup>」したがって、「『今、目の前にいる幼児たちに何が必要なのか』『それはどのようなすじみちで子どもたちが経験していくべきなのか』『その前に何が必要であり、その後はどうなっていくものなのか』『幼児なりに主体的に活動していくための手だてとしてはどうか』というようなことが検討されていかなければならない。<sup>62)</sup>」そうしたことから、大場牧夫の所属園である桐朋幼稚園で成立したのが、保育者の働きかけ全体を構想する際の基本的考え方を示す「三層六領域構造」<sup>63)</sup>である。図1がそれである。その中の「あそび」については、「まず子ども自身の活

動として、『遊び』を重視したい」と述べられ、「生活と仕事」については、「子どもなりの生活の自主管理の動きと共に、生活を豊かに、味のあるものにする活動でもある」と述べられている<sup>64)</sup>。また、「課題に向かう活動」については、「教師によって計画化された課題を、いかに子ども自身の課題意識において消化するかということである」とか、「幼稚園の生活の流れにそってこれらの課題が計画されなければならない」とかと述べられている<sup>65)</sup>。また、「これら各三層は相互に密接な関連をもっていると考えるなければならない」と、また、「幼稚園教育要領に示されているような内容もこの構造の中に位置づけて考えているといえよう」と述べられている<sup>66)</sup>。

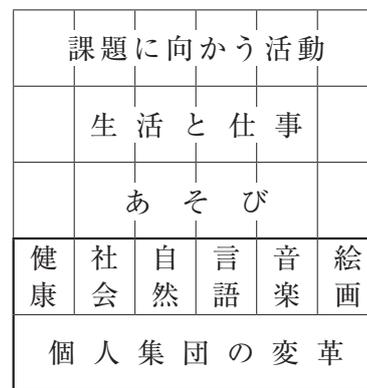


図1 大場牧夫の1974年の三層六領域構造

以上の分析・考察に基づけば、この図は、次のように理解できる。保育目的を実現するためには、子どもたちの表しを出発点に、発達の流れにそって、常にかつ積極的に、子どもたちにプラスの変化をもたらしつつ、子どもたちのかたまりが群れから集団に変化していくための働きかけが必要である。その働きかけは、個人と集団の変革のための働きかけと言ってよい。そうした働きかけの全体は、子どもたちの園生活全体を、「あそび」、「生活と仕事」、「課題に向かう活動」という三層構造でとらえて、幼稚園教育要領の六領域の内容も考慮しながら構想することによって、生み出すことができる。

それでは、このように三層六領域構造として保育者の働きかけ全体を構想しようとする場合、日頃の保育はどのように生み出され、また、カリキュラムはどのように作成されて、最終的に、彼の保育目的を実現できるであろう、1974年の三層構造カリキュラムの成立に至ることができたのであろうか。そのことを解明する上で事前に確認しておく必要のあることをここにあげておく。月の計画とカリキュラムについては、1974年公表の大場牧夫の保育構造論では、「生活設計」すなわち、「一人一人の子どものもつ流れを生かしながら、学級集団としての、また

園生活全体の流れを作り出すよりどころ」という意味を込めて、「マスタープラン」と呼ばれている<sup>67)</sup>。また、保育者の働きかけを方向づける「カリキュラムの問題と、教材、具体的方法の問題」は、「やはり一つの仮説である」、「教育実践において初めて確かめられるものといえよう」と述べられている<sup>68)</sup>。

前述のように、大場牧夫は、1965年頃から、生活をとおしての保育を追求するようになる。したがって、そのよりどころとしての、園生活全体あるいは月のマスタープランを作成する歩みが始まることになる。その際の累積資料の中心になったのが、前述のように、週案である。大場によれば、このマスタープラン作成の基礎資料となる週案は、同時に、「今、目の前にいる子どもたちを考えながら作成、立案するからこそ意味がある」ものであり、「マスタープランで大きく方向づけられた園生活の中で」、「基本的な教育の方向と実践との接点として」「重視される」<sup>69)</sup>。つまり、それまでに作成された週案が、園生活全体あるいは月のマスタープランを作成する際の累積資料の中心になり、作成されたマスタープランと密接に関係する日頃の保育を生み出すのが、週案作成の営みということになる。ただし、大場においては、その在り方が重要になる。彼は言う。「昭和三五年に開始した週案の教師集団としての検討、作成は…今日のマスタープラン作成の歩みとして大切な意味をもっていた。<sup>70)</sup>」「一学級二人の複数担任制をとっているだけに、そして意図的に、年少組から年長組への担任持ちよりをしないだけに、この週案の打ち合わせは、マスタープランを実践的に具体化していくための教師集団の指導体制を固める大切な場であり、作業である。<sup>71)</sup>」こうした経験を持つ大場は、「週案を個々の教師の個人プランとして放置している幼稚園は、おそらく、マスタープランは無に等しい<sup>72)</sup>」とさえ述べる。つまり、週案の教師集団としての検討、作成があって初めて、園生活全体あるいは月のマスタープランを作成する際の累積資料の中心が得られると共に、作成されたマスタープランと密接に関係する日頃の保育が成立するのである。

このことに加えて、三層構造カリキュラムの成立をもたらしたのが、累積された週案等に基づいて月のマスタープランを作成する際の工夫である。大場牧夫は言う。「なぜ月の計画が必要かということを考える場合に、やっぱり実践に結びつく週案を作成する時に、話し合いだけでは『大きな流れ』がつかみとりにくい、「つまり前の週から次の週への流れをもっと意識するために必要だろう。<sup>73)</sup>」この大きな流れを意識するのは、「毎日の子どもたちの集団

生活そのもの」を「構造化」するために、「その意義、位置づけの再検討がされ、目標、方法などを再確認することが必要になってくる」<sup>74)</sup>からである。つまり、毎日の子どもたちの集団生活の構造化をより徹底するために、月のマスタープランが必要になるということである。この月のマスタープランは、当然ながら、三層六領域構造の視点に立って作成され、その際の工夫が重要になる。まず、「子どもの状態」について「個人と集団との両面でとらえ」、「一人一人の子どもと集団を変革していく」ための「働きかけの要点」を「三つの活動の層を支える考え」ないし「三層構造の土台」として得る。それに基づいて、「遊びの重点」と「生活と仕事の重点」と「課題活動の重点」が考えられることになる<sup>75)</sup>。そうして成立する月のマスタープランによる実践結果の「点検」は、その際に使用する「チェックリスト」の作成・検討の積み重ねをとおして、より正確に行われるように努められている<sup>76)</sup>。つまり、月のマスタープランを作成する際のこれらの工夫が、三層構造カリキュラムの成立の前提にある。

これらの過程で作成される週案と月のマスタープランは、前述のように、あくまで一つの仮説ととらえられており、実践において確かめられ改善され、相互に影響を与えることになる。そうして得られた資料を基礎にして、「『遊び』『生活と仕事』『課題活動』の三層構造による園生活について、四歳児（年少）五歳児（年長）の二年間を六期にまとめてその発展を考え、その「六期にわたる流れにそって生活の内容を発展的に考えたもの」としての三層構造カリキュラム<sup>77)</sup>が、成立したといえるのである。

なお、月のマスタープラン作成においては、注目すべき記述がある。「生活と仕事の重点」にかかわり、「年齢によってあるいは子どもによっては、遊びと仕事の区別がない場合もあることを重視しておく必要がある<sup>78)</sup>」と述べられている。つまり、ここでの大場による「遊び」と「生活と仕事」という分け方は、あくまで、保育目的を実現するための基本的な考え方であり、子どもの気持ちを出発点にして、この分け方ではとらえられない例外的なものも認めようとする柔軟性のあるものである。したがって、従来の保育構造論批判、すなわち、子どもの生活や活動を保育者の立場から一方的に分断的にとらえる傾向になるという批判は、1974年段階の大場牧夫の保育構造論に対してさえ、妥当であるとはいえないのである。

## 5. 総括的考察

本稿の研究対象は、1974年公表の大場牧夫保育

構造論である。まず、彼の保育構造論の成立・発展史を概観し、その中に位置づけた上で、その成果に基づきつつ、横松らの示す保育内容構造論の検討や構築の在り方も参考にしながら、新たな視点を提示し、加えて、再分析し再考察している。

大場牧夫は、1970年頃に、保育目的を得ている。それは、目の前の子どもたちの持っている表しを本当に大切にすると、そして、その子どもたちが、友達や先生との人間関係の中で、本当に、信頼関係、認め合い、そして愛を感じられるようにすることであるといえる。そして、1974年公表の大場牧夫の保育構造論は、彼の保育目的を実現するであろう三層構造カリキュラムの成立を可能にした最初の保育構造論であり、その後も検討され発展させていく元になるものと位置づけることができる。

その1974年の大場の保育構造論において、保育目的を実現できる保育者の働きかけ全体を生み出すための基本的な考え方は、次のようにまとめることができる。保育目的を実現するためには、子どもたちの持っている表しを出発点に、発達の流れにそって、常にかつ積極的に、子どもたちにプラスの変化をもたらしつつ、子どもたちのかたまりが群れから集団に変化していくための働きかけが必要である。その働きかけは、個人と集団の変革のための働きかけと言ってよい。そうした働きかけの全体は、子どもたちの園生活全体を、「あそび」、「生活と仕事」、「課題に向かう活動」という三層構造でとらえて、幼稚園教育要領の六領域の内容も考慮しながら構想することにより、生み出すことができる。

この基本的な考え方にに基づき、1974年公表の三層構造カリキュラムの成立を可能にした諸工夫は、次の通りである。保育者集団による週案の作成及び検討により、日頃の保育を生み出し、累積された週案等を資料にして、園生活全体あるいは月のマスタープランを作成する。さらに、保育者集団による週案の作成及び検討により、作成されたマスタープランと密接に関連する日頃の保育を追求する。ただし、三層六領域構造の視点に基づいて日頃の保育を生み出すためには、園生活の大きな流れを意識することを可能にする月のマスタープランを作成する必要がある、その際にも、三層六領域構造の視点を徹底するための工夫を行う。なお、その過程で作成される週案と月のマスタープランは、あくまで一つの仮説であり、実践において確かめられ改善され、相互に影響を与えることになる。こうして得られた累積資料を基礎にして、園生活全体の流れ及び内容を発展過程としてとらえることにより、三層構造カリキュラムはとりまとめることができる。

それと共に、大場牧夫の保育構造論は、目の前の子どもたちの持っている表しを本当に大切にすることとすることを根本的な視点として持っている。したがって、彼が1974年に示した三層六領域構造も、あくまで、保育目的を実現できる保育者の働きかけ全体を確実に生み出すための基本的な考え方であり、子どもの気持ちを出発点にすれば、この分け方ではとらえられない例外的なものも認めようとする柔軟性のあるものである。つまり、従来の保育構造論批判、すなわち、子どもの生活や活動を保育者の立場から一方的に分断的にとらえる傾向になるという批判は、1974年段階の大場牧夫の保育構造論に対してさえ、妥当であるとはいえないのである。

#### 引用文献・注

- 1) 中央教育審議会『教育課程企画特別部会 論点整理』中央教育審議会、2015年、10-11頁。
- 2) 同上書、14頁。
- 3) 同上書、15頁。
- 4) 同上書、16頁。
- 5) 中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会『次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめ』中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会、2016年、25頁。
- 6) 中央教育審議会『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について(答申)』中央教育審議会、2016年。
- 7) 次の辞典・事典を参照している。平岩定法「保育内容」岡田正章・森上史朗編『保育基本用語辞典』第一法規、1980年、130-131頁。小川博久「幼児教育の構造」日本教育方法学会編『現代教育方法事典』図書文化社、2004年、133頁。岩崎婉子「保育内容の構造」森上史朗・柏女霊峰編『保育用語辞典[第8版]』ミネルヴァ書房、2015年、51-52頁。
- 8) 小木美代子「戦後わが国の「保育構造」論をめぐって 1960年代以降を中心にして」『保育研究』第6巻第2号、1985年、26-38頁。
- 9) 田中まさ子『幼児教育方法史研究—保育者と子どもの共生的生活に基づく方法論の探求—』風間書房、1998年、326頁。
- 10) 小川博久「幼児教育の構造」前掲書、133頁。
- 11) 光本弥生「「保育構造」論についての一考察」『中国四国教育学会 教育学研究紀要』第46巻第1部、2000年、630頁。
- 12) 同上書、630-631頁。
- 13) 藤野敬子・森上史朗・吉村真理子「座談会 構

- 造論は保育実践に役立つのか」『保育研究』第6巻第2号, 1985年, 9頁。
- 14) 横松友義・浅野泰昌・近行あさみ・姚金粧「これからの保育構造論構築に関する一考察」『岡山大学教育学部研究集録』第136号, 2007年, 108頁。
- 15) 同上書, 103-110頁。
- 16) 大場牧夫 望月威征編『原点に子どもを—大場牧夫の保育論』建帛社, 1994年, 参照。
- 17) 同上書, 172頁。
- 18) 同上書, 173-174頁。
- 19) 同上書, 38頁。
- 20) 同上書, 4頁
- 21) 同上書, 38頁。
- 22) 同上書, 38頁。
- 23) 同上書, 65-66頁。
- 24) 同上書, 38頁。
- 25) 同上書, 2頁。
- 26) 同上書, 10-11頁。
- 27) 同上書, 24頁。
- 28) 同上書, 24頁。
- 29) 同上書, 166頁。
- 30) 同上書, 67頁。
- 31) 同上書, 167頁。
- 32) 同上書, 67-76・167頁, 参照。
- 33) 小木美代子「戦後わが国の「保育構造」論をめぐって 1960年代以降を中心にして」前掲書, 30-31頁。
- 34) 石垣恵美子「就学前教育の構造の分析」『就学前教育の研究—日本とイスラエルの比較を軸に—』風間書房, 1988年, 484・492-494頁。
- 35) 小山優子「幼児教育カリキュラムの史的展開—戦後わが国の「保育構造」論を中心にして—」『鳥根女子短期大学紀要』第40号, 2002年, 44頁。
- 36) 師岡章「保育計画の構造化に関する研究(1)—「保育構造」論の検討—」日本保育学会第44回大会準備委員会編『日本保育学会大会研究論文集』, 1991年, 278-279頁。
- 37) 光本弥生「「保育構造」論についての一考察」前掲書, 627-628頁。
- 38) 小川博久「幼児教育の構造」前掲書, 133頁。
- 39) 横松友義・浅野泰昌・近行あさみ・姚金粧「これからの保育構造論構築に関する一考察」前掲書, 104頁。
- 40) T.S.Kuhn, *The Structure of Scientific Revolutions*, Third Edition, The University of Chicago Press, 1996. (トーマス・クーン 中山茂訳『科学革命の構造』みすず書房, 1971年。)
- 41) 横松友義・浅野泰昌・近行あさみ・姚金粧「これからの保育構造論構築に関する一考察」前掲書, 107頁。
- 42) 同上書, 109頁。
- 43) 同上書, 109頁。
- 44) 大場牧夫編著『幼児の生活とカリキュラム』フレーベル館, 1974年, 9頁。
- 45) 同上書, 20頁。
- 46) 同上書, 9頁。
- 47) 同上書, 9頁。
- 48) 同上書, 9-10頁
- 49) 同上書, 9頁。
- 50) 同上書, 9頁。
- 51) 同上書, 9頁。
- 52) 同上書, 10頁。
- 53) 同上書, 10頁。
- 54) 同上書, 10-11頁。
- 55) 同上書, 11頁。
- 56) 同上書, 10-11頁。
- 57) この著書は, フレーベル館から発行され, 執筆者は, 10版(1966年発行)を参照している。10版には初版の発行年は示されておらず, 24版(1973年発行)に初版は1958年とされている。大場牧夫が何版を資料としているかは不明である。
- 58) この著書は, 光文社から発行され, 執筆者は, 4版(1960年発行)を参照している。4版によれば, 初版は1957年である。大場牧夫が何版を資料としているかは不明である。
- 59) 大場牧夫編著, 前掲書, 11頁。
- 60) 同上書, 11頁。
- 61) 同上書, 12頁。
- 62) 同上書, 12頁。
- 63) 同上書, 12頁。
- 64) 同上書, 12頁。
- 65) 同上書, 12頁。
- 66) 同上書, 12頁。
- 67) 同上書, 13・20頁。
- 68) 同上書, 11頁。
- 69) 同上書, 154頁。
- 70) 同上書, 154頁。
- 71) 同上書, 154頁。
- 72) 同上書, 154頁。
- 73) 同上書, 21頁。
- 74) 同上書, 20頁。
- 75) 同上書, 22頁。
- 76) 同上書, 23-29頁。
- 77) 同上書, 13-14頁。
- 78) 同上書, 22頁。